



あ……
よなっ

それを喰っては……っ

もぐもぐ

この家には人魚の肉というものがある。
嵐の翌朝、村の浜辺に流れ着いた男が

命を救ってもらったお礼にとよこしたものであった。

男曰く、これは竜宮城で貰った物で一口食べれば靈験あらたか。
不老不死を天より授かるとのこと。

しかし仏門の身であるその男はそれを口にすることができず、
贈与された村人も不気味がってやはり口にはしなかった。

1年、2年、10年が経とうとも腐りも乾きもせず、
てらてらと美味そうに輝いていた。捨てるのも忍びなく
床の間に奉じておったものを事情を知らぬ娘が食べてしまった。

よなという名の娘である。


それ以来よなの身体はぱったりと成長を止め、
大きなけがをした時も3日もすれば綺麗に治ってしまうのだった。
これはめでたき人魚の力。と喜ぶよりも心配の方が勝り
残った人魚の肉を持ち山を越えた先に居る高名な僧の元へ
相談に向かった。

僧曰く

「紛う方無き不老不死の妙薬である。

しかしてこれは天の加護というより呪いに似たり」

ある日、不老不死の娘がいるという噂を聞いた男たちがよなを村からさらってしまった。男たちは近隣の村々から山鬼と呼ばれる残忍な山賊であった。時折山から下りては人々を犯し、殺して、田畑を荒らす。税を預かる地頭にとっても頭の痛い集団であったが、武士たちがやってくる前に山のどこかで姿を消してしまう。そんな男たちに、ゆなはさらわれてしまったのだ。



「この娘が真に不老不死であるならばありがたい」
「普通の娘をさらって犯しても我々が楽しんでいる最中に死んでしまう、この娘ならば我々全員を楽しませることができるだろう」
「どれ、まずはわしからだ」

それにしても本当に
噂通りの不老不死なのかね

さてね。
まあ、試してみればわかることさ

本当ならばそれでよし
違うのならば……
まあ少しは楽しめよう





どれ、それじゃ
おっぱい始めるか

ひっ
やっやめ……

グイッ

フキヤッ

グイッ





はははっ！
小さいだけあって
良い締めまりしてやがるっ

グググ

グググ

グググ

おっおっおっ

おっおっ

おっ

おっおっおっ

おっおっ

おっおっ

おっおっ





俺様が犯してやってんの
に
ギャーギャーうるせえんだよツ!!

そーだ、こうすりゃ
ギヤーギヤー騒げねえだろ

てめえが本当に不老不死かも
確かめられて一石二鳥だぜ





ふーやったやった
...お?こいつ

首ねじきるつもりで
締めてやったのに
まだ生きてるぜ

こりやおもしろえや
本当に不老不死かもな

ゴブツ

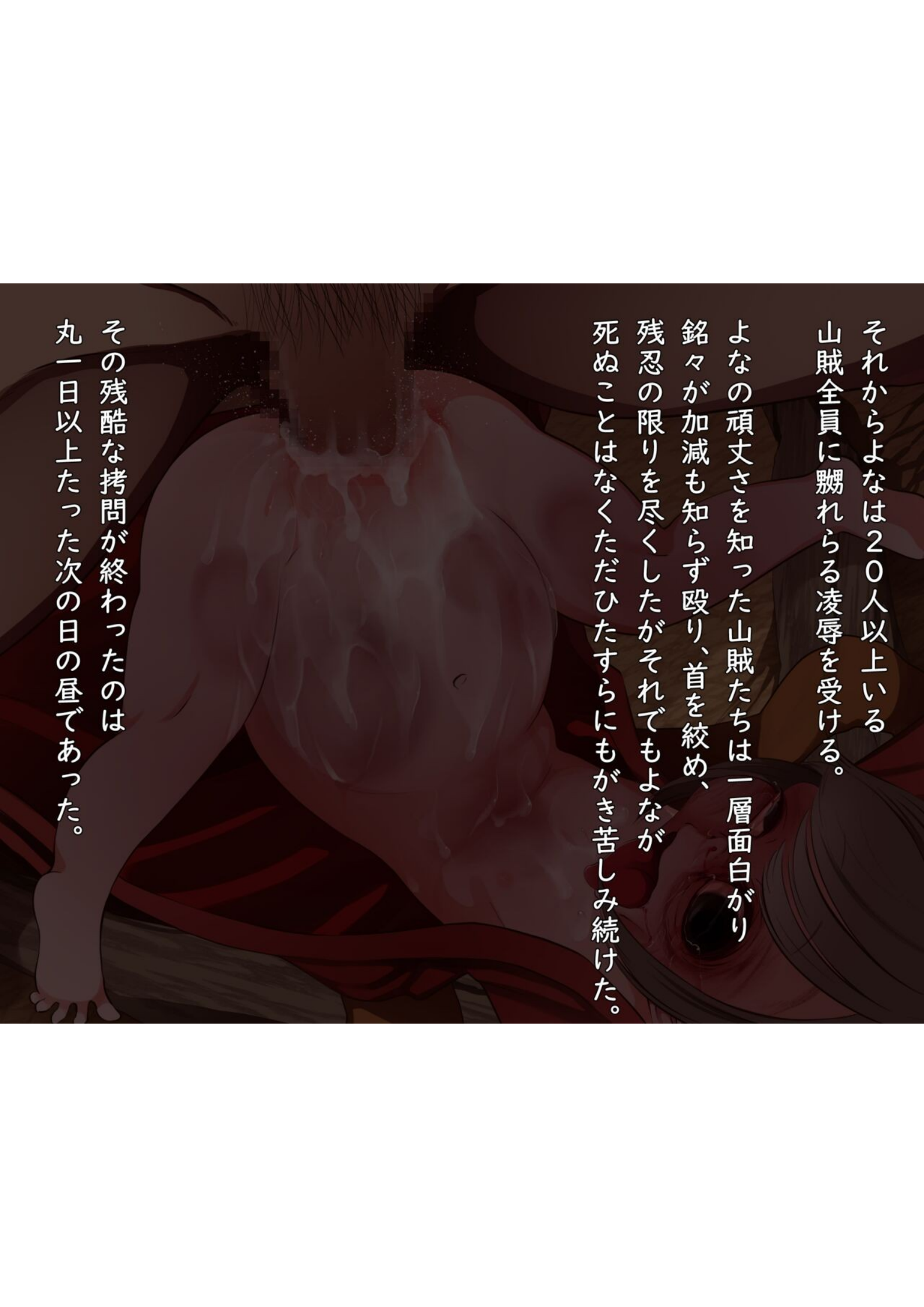
じりび...

クッ

クッ

あ...

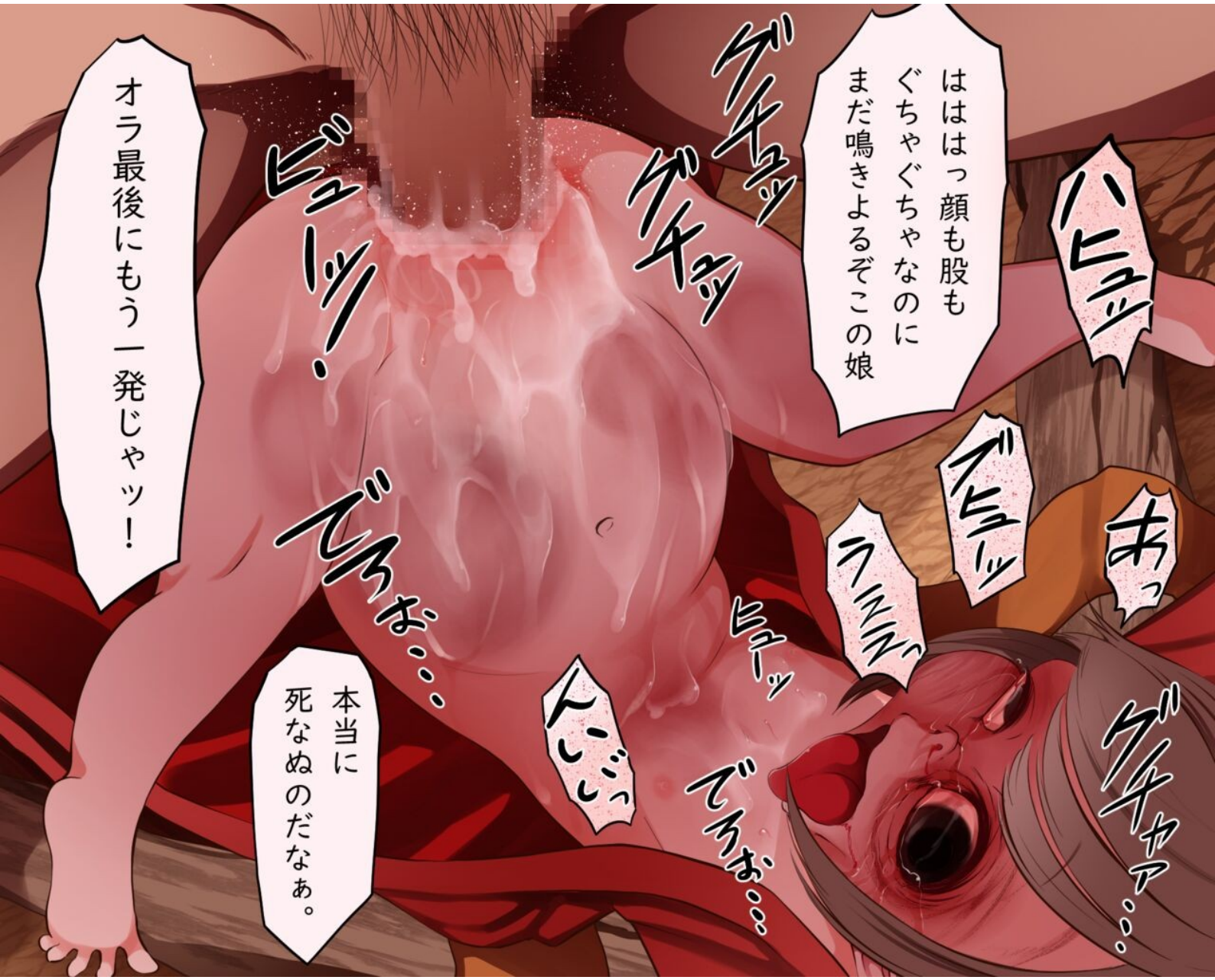
あ...



それからよなは20人以上いる
山賊全員に戮れらる凌辱を受ける。

よなの頑丈さを知った山賊たちは一層面白がり
銘々が加減も知らず殴り、首を絞め、
残忍の限りを尽くしたがそれでもよなが
死ぬことはなくただひたすらにもがき苦しみ続けた。

その残酷な拷問が終わったのは
丸一日以上たった次の日の昼であった。



はははっ顔も股も
ぐちゃぐちゃなのに
まだ鳴きよるぞこの娘

ハクツツ

ブクツツ

あッ

クククク

ククツツ

でろお...

グクチャア...

んいっ

グクツツ!

でろお...

本当に
死なぬのだなあ。

オラ最後にもう一発じゃッ!



いやあ遊んだ遊んだ。

コイツは噂に違わぬ
不老不死よ！

ずりやう...

んく...

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

んく...

こりやあしばらく
楽しめそうだ

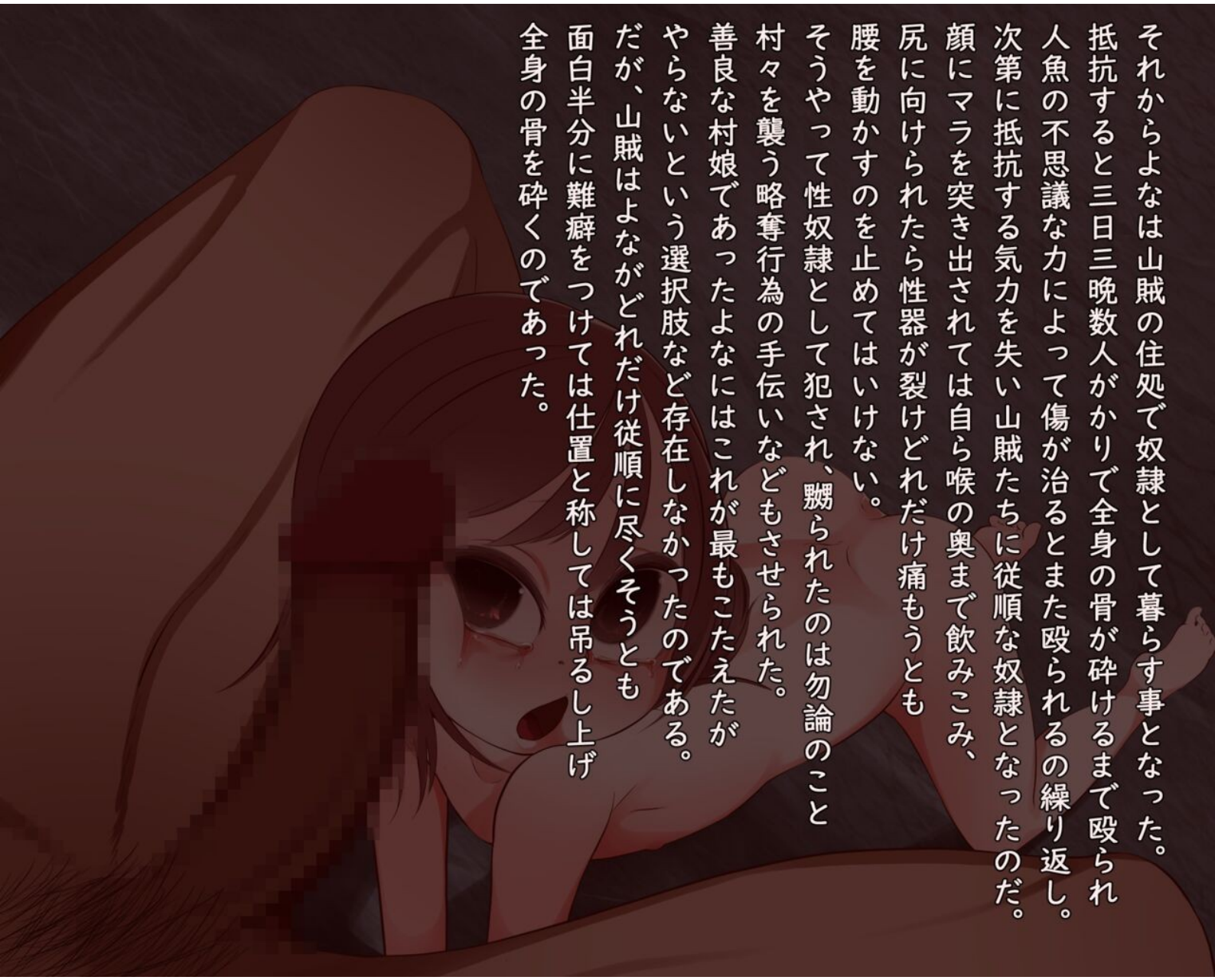
アムムム...

グチャ
グチャ

ゴ
ボ
ボ
ボ
ボ

これから毎日全員で
いたぶってやるからな……
己の不老不死を呪うんじやのう





それからよなは山賊の住処で奴隷として暮らす事となった。抵抗すると三日三晩数人がかりで全身の骨が砕けるまで殴られ人魚の不思議な力によって傷が治るとまた殴られるの繰り返し。次第に抵抗する気力を失い山賊たちに従順な奴隷となったのだ。顔にマラを突き出されては自ら喉の奥まで飲みこみ、尻に向けられたら性器が裂けどれだけ痛もうとも腰を動かすのを止めてはいけない。そうやって性奴隷として犯され、黷られたのは勿論のこと村々を襲う略奪行為の手伝いなどもさせられた。善良な村娘であったよなにはこれが最もこたえたがやらないという選択肢など存在しなかったのである。だが、山賊はよながどれだけ従順に尽くそうとも面白半分には難癖をつけては仕置と称しては吊るし上げ全身の骨を砕くのであった。

おい犬っ！
とつとと啜えろ。

それともまた
全身の骨を砕いてやろうか？

ひっ……
くくわえますう……

くわえさせて
くだひゃいっ……

このあいだは
楽しかったなあ

金槌で一本一本念入りに
砕いてよお……





おいおい……
殴られすぎてちんこの
啞え方も忘れたかあ？

全然やる気ねえんじや
ねえかあ？

んむっ……

っっ

っっ

ぐぼっ
ぐぼっ

じゃろ

ズッ
ズッ



ははははっ
そりやおもしれえや!

ほいじゃ……
ケツに手えでも突っ込めば
ちったあケツに力込めて
仕事しよるかの?

なんじゃ
やる気なくなつたんか?

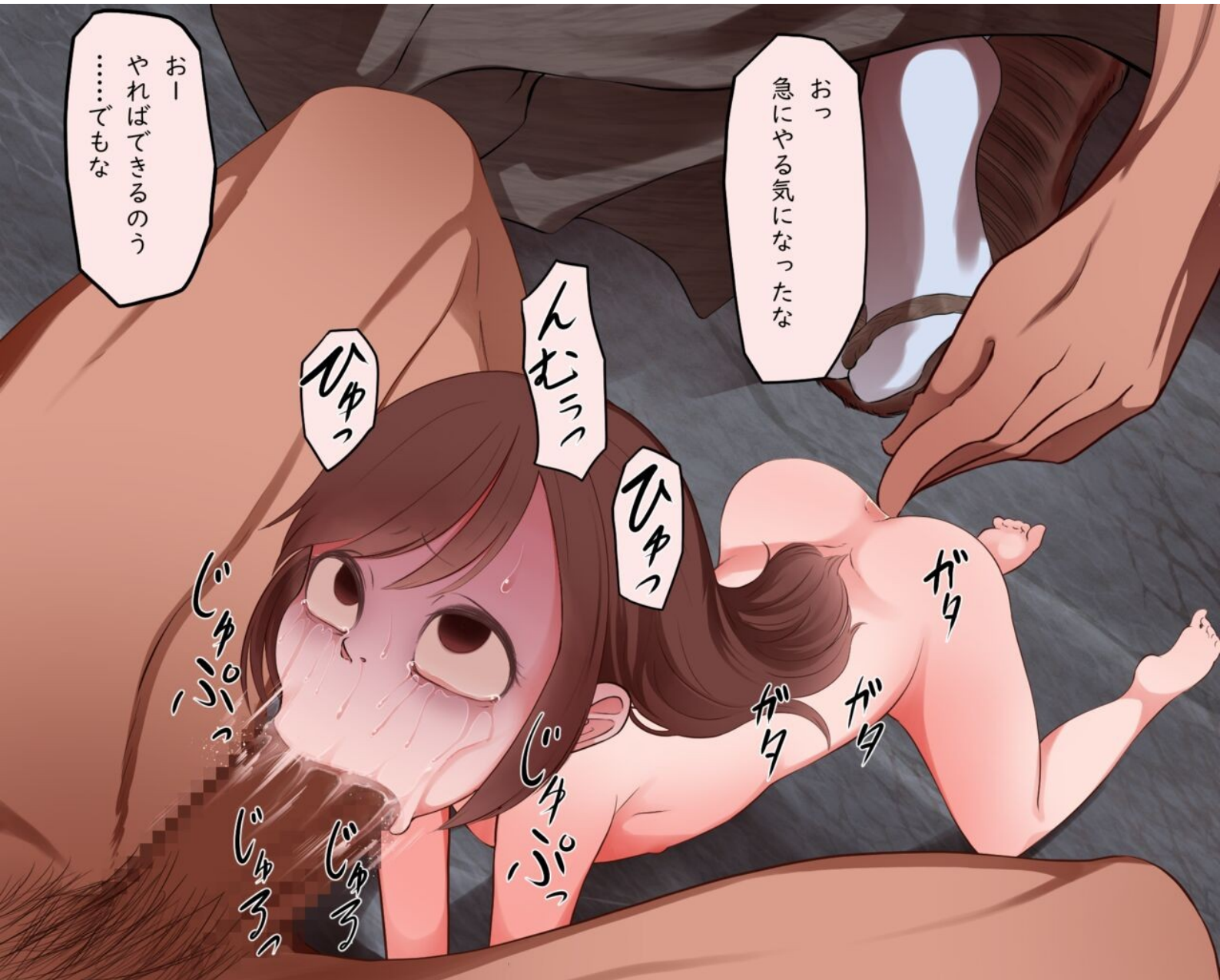
んんん

ゾオオオ...

ゴウツ

トッ...

ガク
ガク



おー
やればできるのう
……でもな

おっ
急にやる気になったな

ひゅっ

んむらっ

ひゅっ

いちゃっ
いちゃっ
いちゃっ
いちゃっ

いちゃっ
いちゃっ

が
が
が
が



だったらはじめから
やらんかいッ!!

グググ

グググ

グググ

サアアアッ

グググ

グググ

グググ

ア



はっはっは、こりゃいいや
急に熱くなって良い塩梅だ！

んおギッ

んんッ

おおおお

んっ

おい、もっと
腕を動かしてくれや！

おッ

んんん

ズホッ

んん

んっ

おッ

ズチ

ズチ

ズチ

ズル

ズル



ほれまだ
終わってねえぞ
次は俺だあ

「ほっ」

ふー
やったやった

「おっ」

「おっ」

ズンズン

「おっおっ...」

ズンズン

「おっお」



ある時、ついに良心の呵責に耐えきれなくなったよなは
自分と同じく囚われていた娘を逃がした。

結果、よなはその行動がばれて山賊に捕まってしまったが
娘は無事に山から逃げのびた。

このままでは娘から岩の場所が侍たちに知られてしまう。

山賊たちは怒り狂い、岩を去るよりも先によなを処刑する事にした。

「クソが……よくもやってくれたな」

「こうなったら侍たちが来る前にここから離れないとならねえ」

「だがその前に……このクソを始末しねえとな」

この不老不死を殺すにはどうすべきか考えた山賊は――



はははっ
いくら不死身だろ
うがやっけて殺し
続けりや
そのうち死ぬだろ

苦しめ苦しめ
いい気味だ

しゃんしゃん

しゃんしゃん

びん
びん
びん

びん

びん

びん

びん

びん

バタ

バタ



そんなに苦しいなら
チンコで支えてやろうか？



おねだりできたら
してやってもいいぜ

チンコで支えて

ひん

ずじ

まんこ広げて
ちんぽいれてくださいって
バカみてえに
お願いしてみろよ

チンコで支えて

チンコで支えて



ひゅあう

おっ
おねがいひまひゅっ

ひゅ
ちんぽおっ

ちんぽっ
くだひゃいっ

ぎゅ

はっ

かにい

くぽあ

よなのおまんこに
おちんちんいれて
くだひゃいっ

はははっコイツマジで
言いやがった

ひゅ



それじゃお望み通り
支えてやるよ

ケツとまんこの
二箇所であつ!!

いおおお

はー!

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ



はースッキリした……
それじゃそろそろ行くか

ま
まって!

おまんこっ
もっとおまんこしてえっ

いき、
できなくないぢりり!

ぐんお……

はっいやだね
モタモタしてたら
侍共が来ちまうからな

てめえはそこで
野垂れ死ぬんだな……
ま、いつ死ぬるか
知らねえけどよ!



ぐるじゅっ!

もうどれだけっ

らくに
なりたいっ

ずっとずっと
苦しいのになんてっ

ひゃん

ひゃん

なんで
しねないのおっ

2
週
間
後





おい
これは……？

山賊どもの砦か……
すでもぬけの殻のようだが

見ろ……
誰か吊るされておるぞ

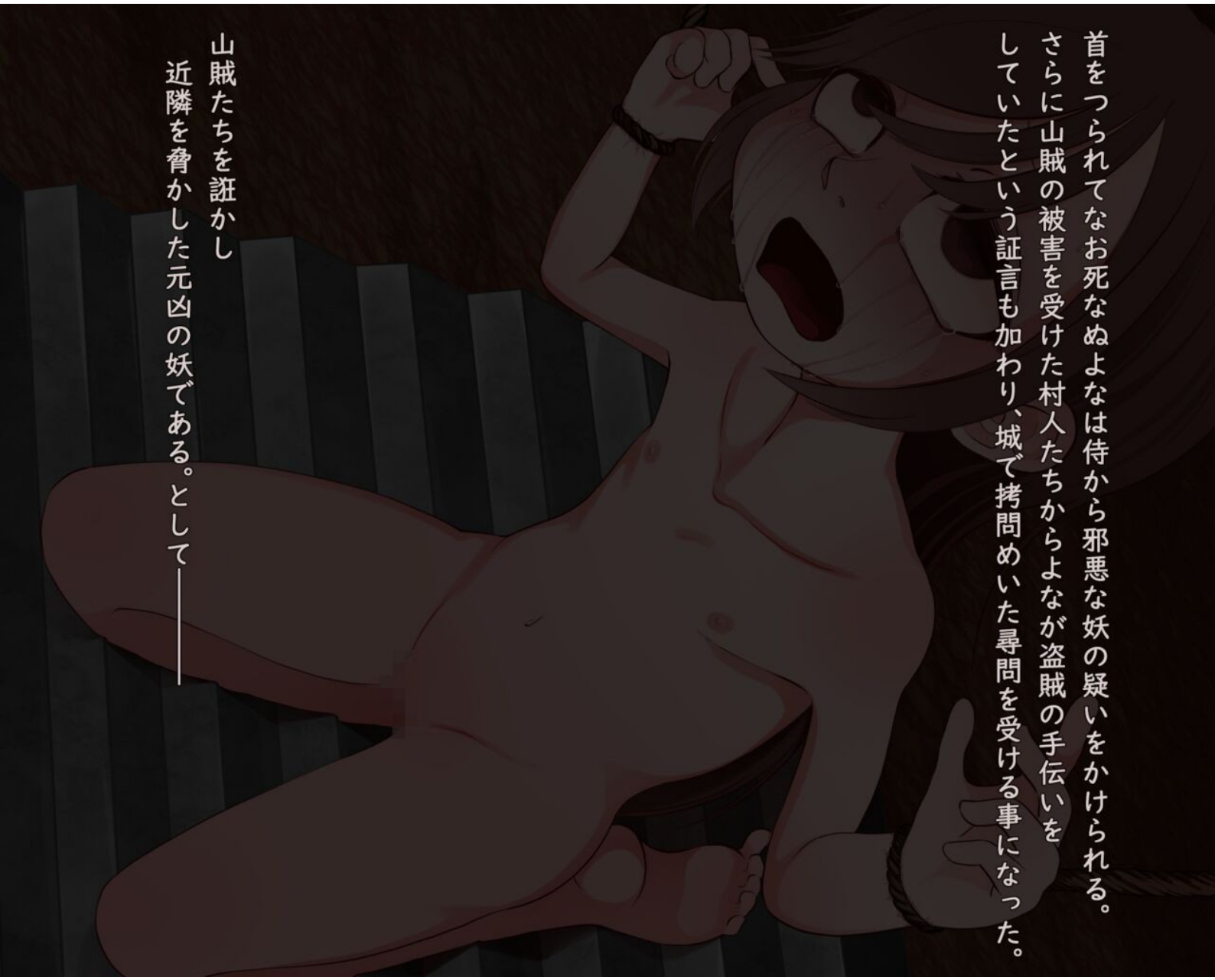
おお……
なんと惨い

だ……
ぎゃ……
ぎゃ……

そんなバカな……
よもや妖の類か!?

!?
こいつ……生きておるぞ

ズム……



首をつられてなお死なぬよなは侍から邪悪な妖の疑いをかけられる。
さらに山賊の被害を受けた村人たちからよなが盗賊の手伝いを
していたという証言も加わり、城で拷問めいた尋問を受ける事になった。

山賊たちを誑かし
近隣を脅かした元凶の妖である。として――



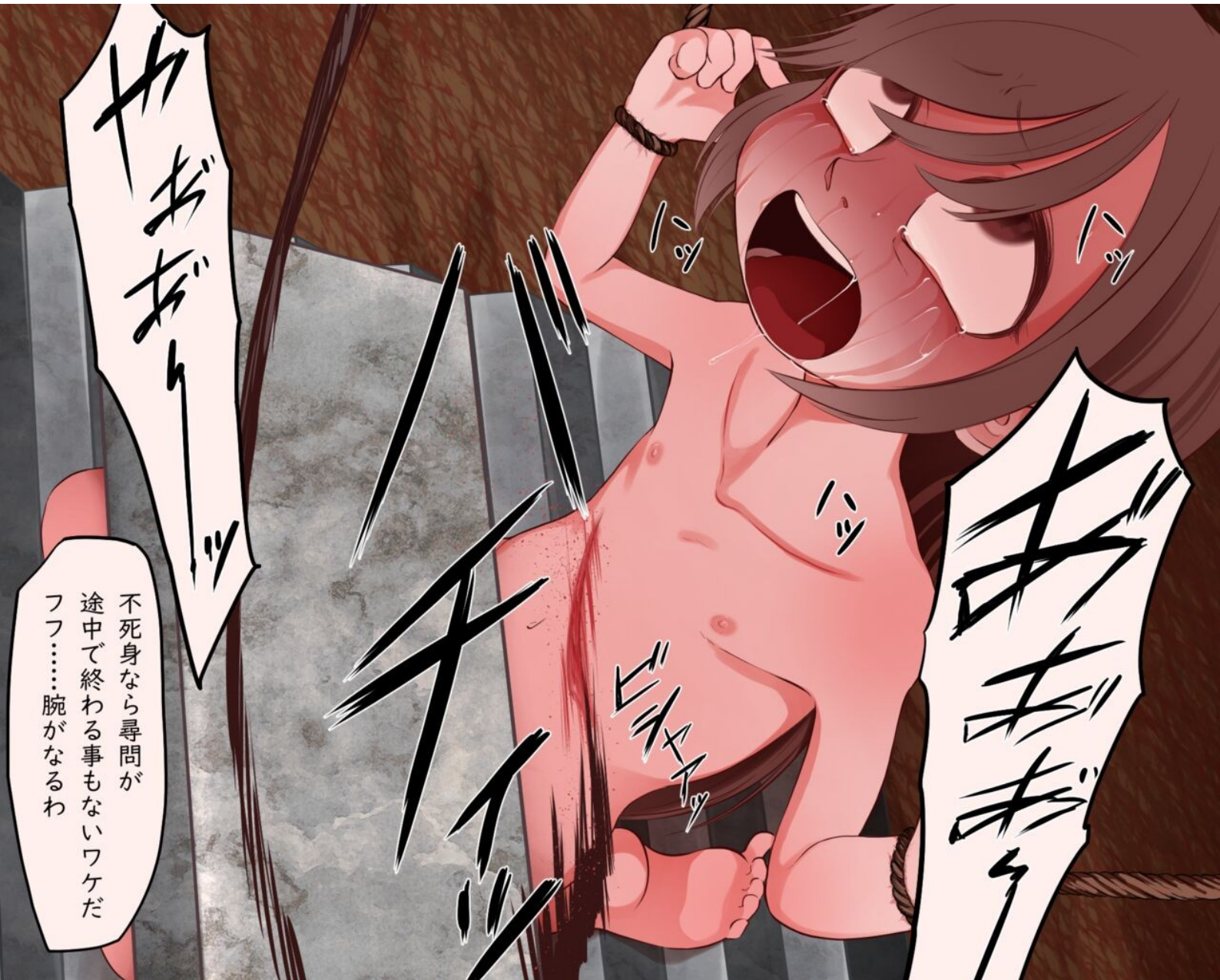
さあ吐け
お前が山賊を誑かし
村々を襲わせたのだな？

ちっ
ちがうっ！

お前が山賊たちと共に
狼藉を働いている所を
見た者がいるのだ

往生際の悪い……
おい、あれを

ちがうっ……
ちがうのっ……



おびおび

おびおび

ツツツツ
ツツツツ
ツツツツ

不死身なら尋問が途中で終わる事もないワケだ
フフ……腕がなるわ



ちがう...

チツ.....ここまで
やってまだ吐かぬか.....

ちがうのお.....

吟味方としては屈辱ではあるが
こうして死なぬのが妖であるという
何よりの証拠よ

妖は人の法では裁かん.....
不死であろうと確実に
滅してやろう

ギク...



あれがこの辺りを
騒がせた山賊の頭だって？

なんでも
不死身の妖だとか

あの外見で人間を
騙していたんだろう

それ本当かよ

村を焼かれた生き残りが
山賊を従えてる所を
見たんだとよ

ヤッげて…

ちねいのあ…

それに奉行所が丸3日も
拷問したのに
死ななかつたらしい

恐ろしいねえ……

ザッ

ザッ

グッ

ビッ

ブル…

妖として処刑されるよなは裸で馬に引きずられる
異例の形での中引き回しを受けた。地面に背中を
削られ激痛が走るが3日間に及ぶ拷問を受けて
もはや抵抗の気力はなかった。

途中、山賊たちの被害を受けた村人たちが怒り狂い
よなを襲った。家を焼かれ、妻と娘を辱められ殺された
男たちの数少ない生き残りである。

家族の仇を弔ろうとする男たちのあまりの剣幕に
引き回しを担当する役人たちも止めることができなかった。



俺の娘はコイツらに
散々犯された挙句
殺されたんだ!!

コイツも同じ目に
合わせてやる!!

ズッ

グ
レ
レ
ッ

ただ殺すだけなんて
許せねえ!!

俺の妻もだ!

ギ
ギ
ッ

ギ
ギ
ッ





どうだバケモノ！
俺の娘の気持ちも少しも
わかったか！

不死身だってんなら
むしろ丁度いい！
今までお前に殺されてきた
女子供の痛みを全部
味わわせてやる！

おげんげんげんげん

は
は
は

パンッ

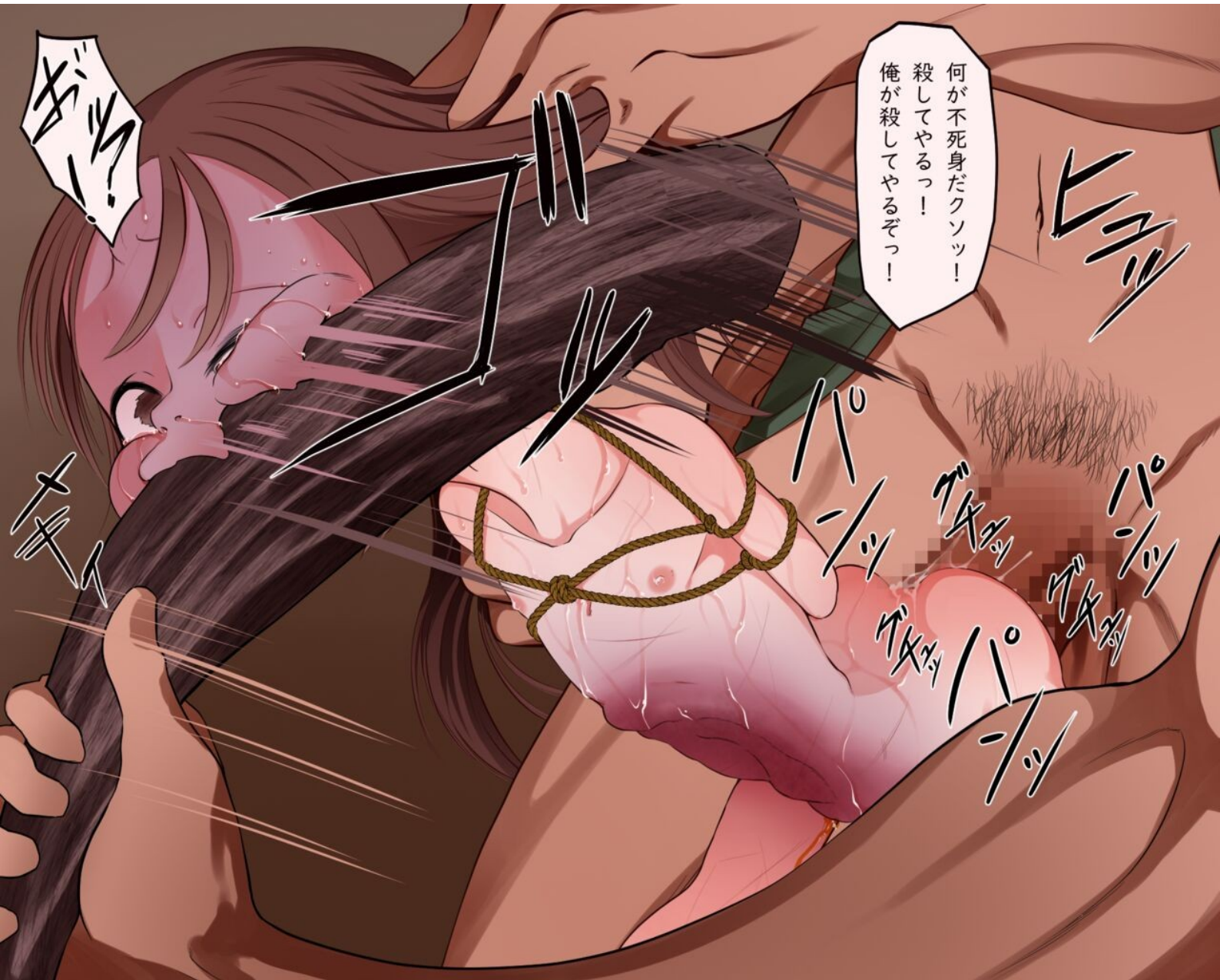
パンッ

パンッ

グチャッ

グチャッ...

ショオオオ



何が不死身だクソッ!
殺してやるっ!
俺が殺してやるぞっ!

ギョッ!

グググ

ギョッ!

パンッ

グググ

パンッ

グググ

パンッ

グググ

パンッ

おいお前ら
その辺にしておけ

し……しかし

お前らの恨みはよくわかった。
しかしそれでは、その妖を
殺す事はできん。

ぐっ……

ま、ここから先は奉行所に
任せておけ

ヒヤッ

ヒヤッ

グググヤッ……



いたいた、見てみるよ。
やっぱりまだ死んでねえ

おび...

おび...

いたいたいたいた

ギ...

マジかよすげえな

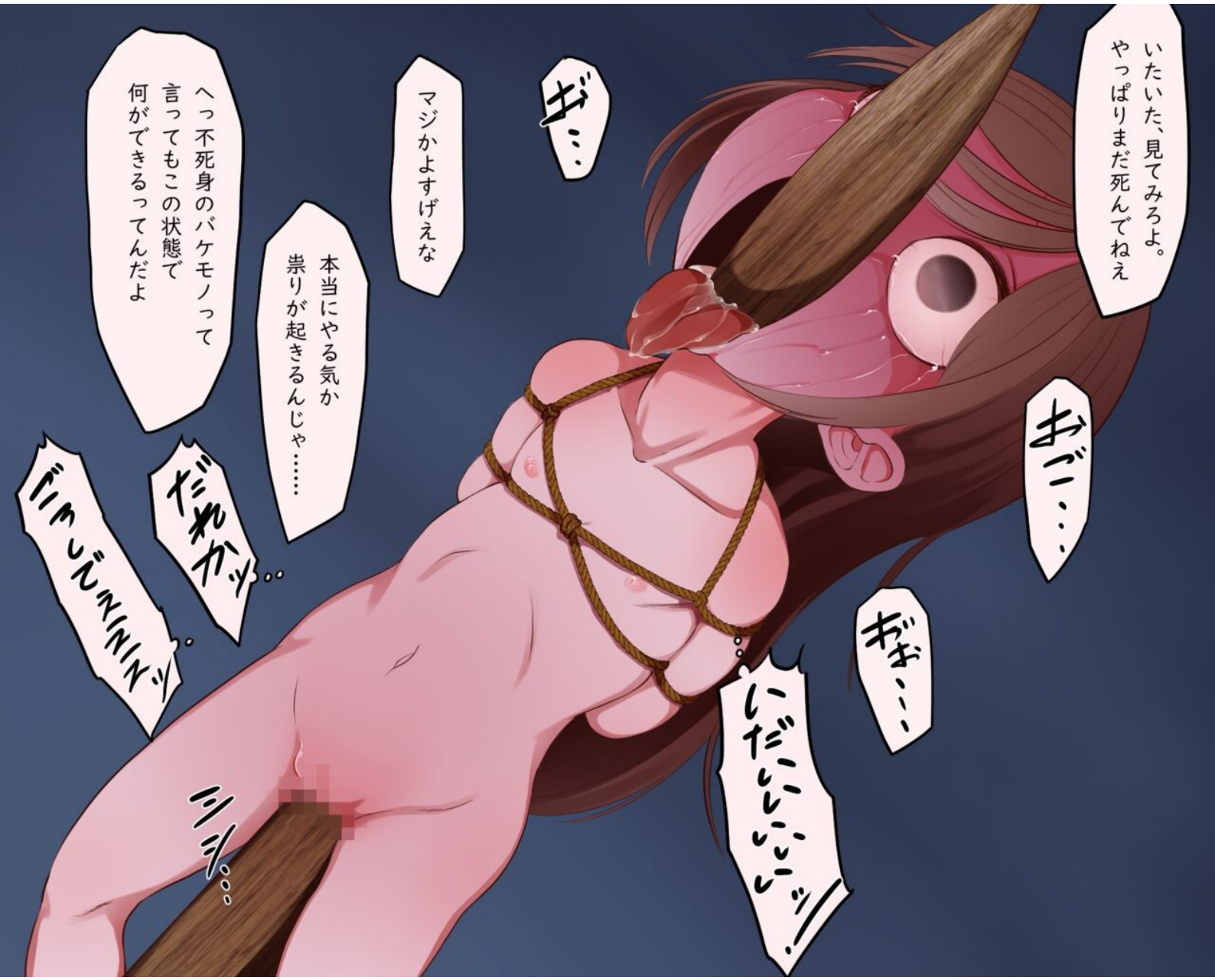
本当にやる気か
崇りが起きるんじゃ...

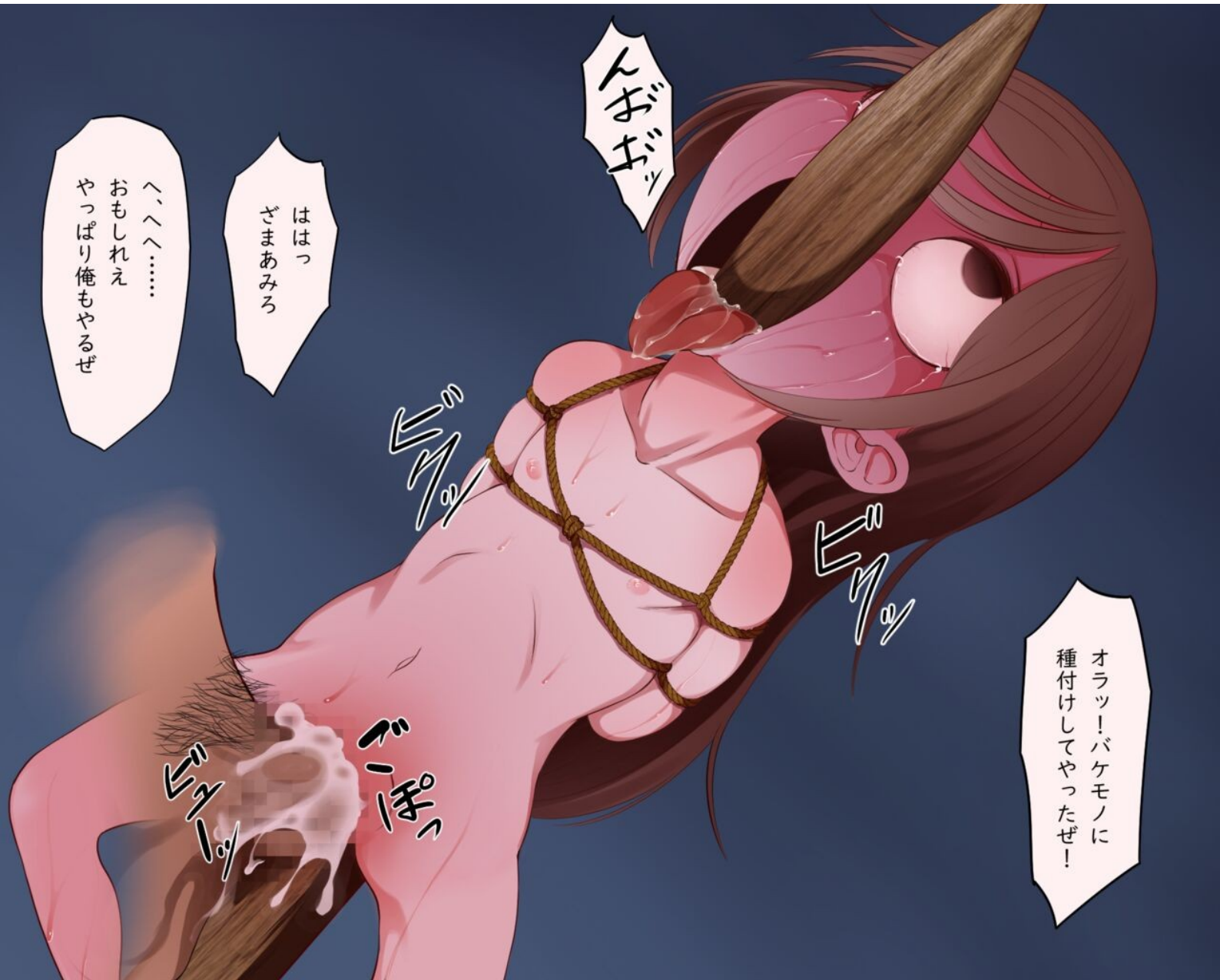
へっ不死身のバケモノって
言ってもこの状態で
何ができるってんだよ

だれが...

IMPUNININ...

ツ...





んおぼッ

ははっ
ざまあみろ

へ、へ、へ……
おもしれえ
やっぱり俺もやるぜ

オラッ！バケモノに
種付けしてやったぜ！

ぐわッ

ぐわッ

ぐわッ

ぐわッ

ち……この臭いは
チンピラの仕業か

バケモノ相手に
よくやるわ

しにたいよま……

ひゃー……

ひゃー……

しにたい……

これでは町の
風紀が乱れる原因になる

やはり完全に
滅してやらねばな



「よなと名乗るあやかしが居ったのは知っておるな」

「たしか山賊の一味であるという。先日処刑されたと聞きました」

「うむ、だがそのよながな……生きておったのだ」

「なんと、首をはねたのではなかったの？」

「はねた、しかし埋めてから一週間もした頃か、

土から出てきおったのだ。それも五体満足の状態でな」

「ほう！それは面白い」

「おぬしならば興味を持つと思ったわい。」

「這い出たと言っても息も絶え絶えではあったがな。」

しかしそんな事があったと城下に知られてはいたずらに不安を煽るだけ。

それから毎日処刑のやり直しよ

首切り、絞殺、槍で百突き、何をやっても一度は死ぬが

すぐに息を吹き返すのだ。油をかけて燃やしてやったこともあったが

ただ悲鳴をあげては死に、また蘇るの繰り返しだ。

三日三晩油を絶やさず燃やし続けても叫び続けるばかりで

灰になる事はなかった。」

「それはまた、少し残酷でありますなあ。」

「恐ろしきはあやかしの方よ、しかしどうやら人を呪い殺すような

神通力はなくただ死なないだけのようだ。

とはいえ、持て余しているのもまた事実……

こんな者をこのまま殺し続けても城の士気が下がるだけだ。

そこでお前ならば役に立てるのではないかと思っただけな」

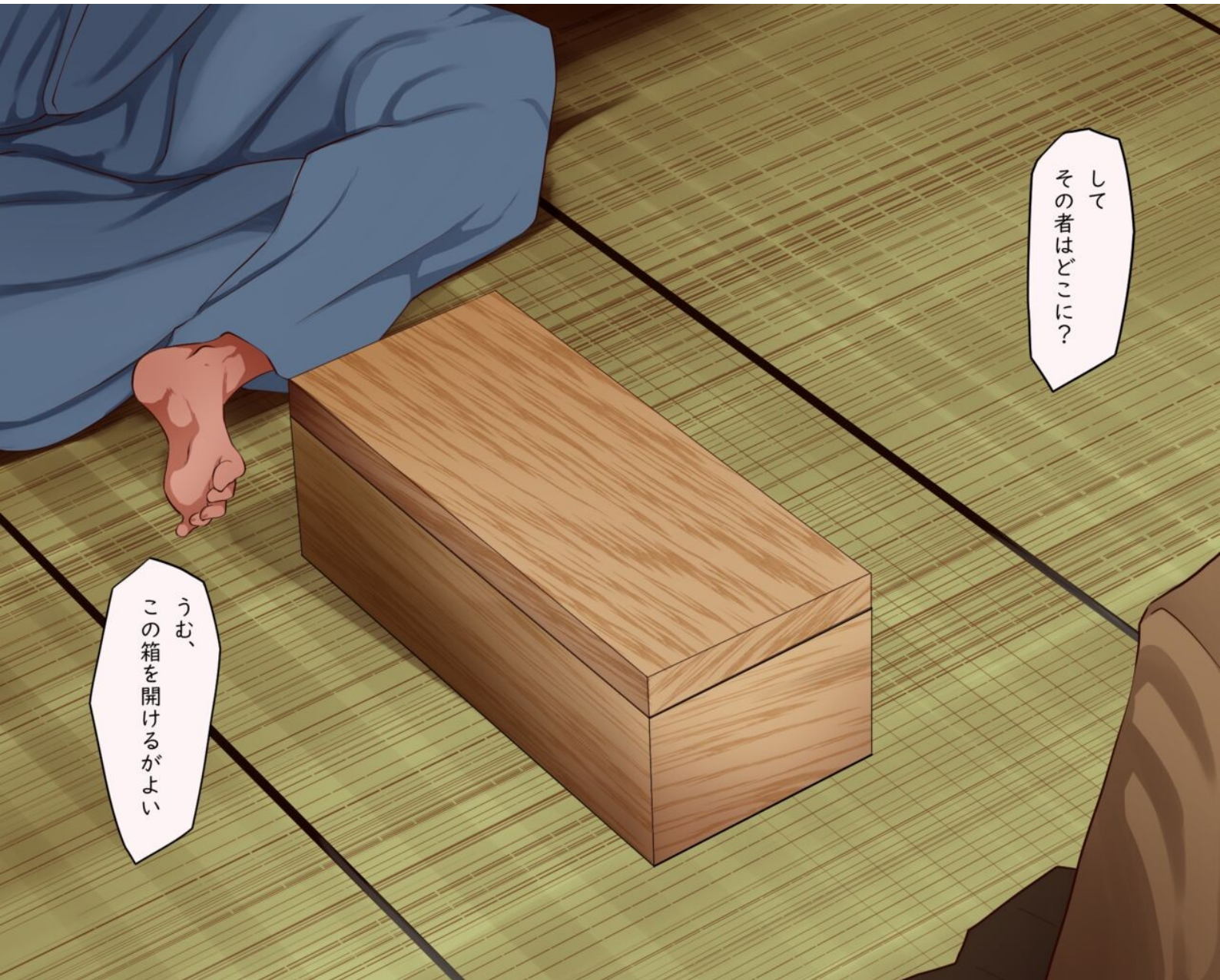
「私でございませうか？」

「今迄、罪人などをお前に渡して薬の実験にあてていたではないか、

それをこれでやると良い。」

「なるほどなるほど、つまり私めにお譲りいただけるといふ事ですか。

これは願ってもない。」



して
その者はどこに？

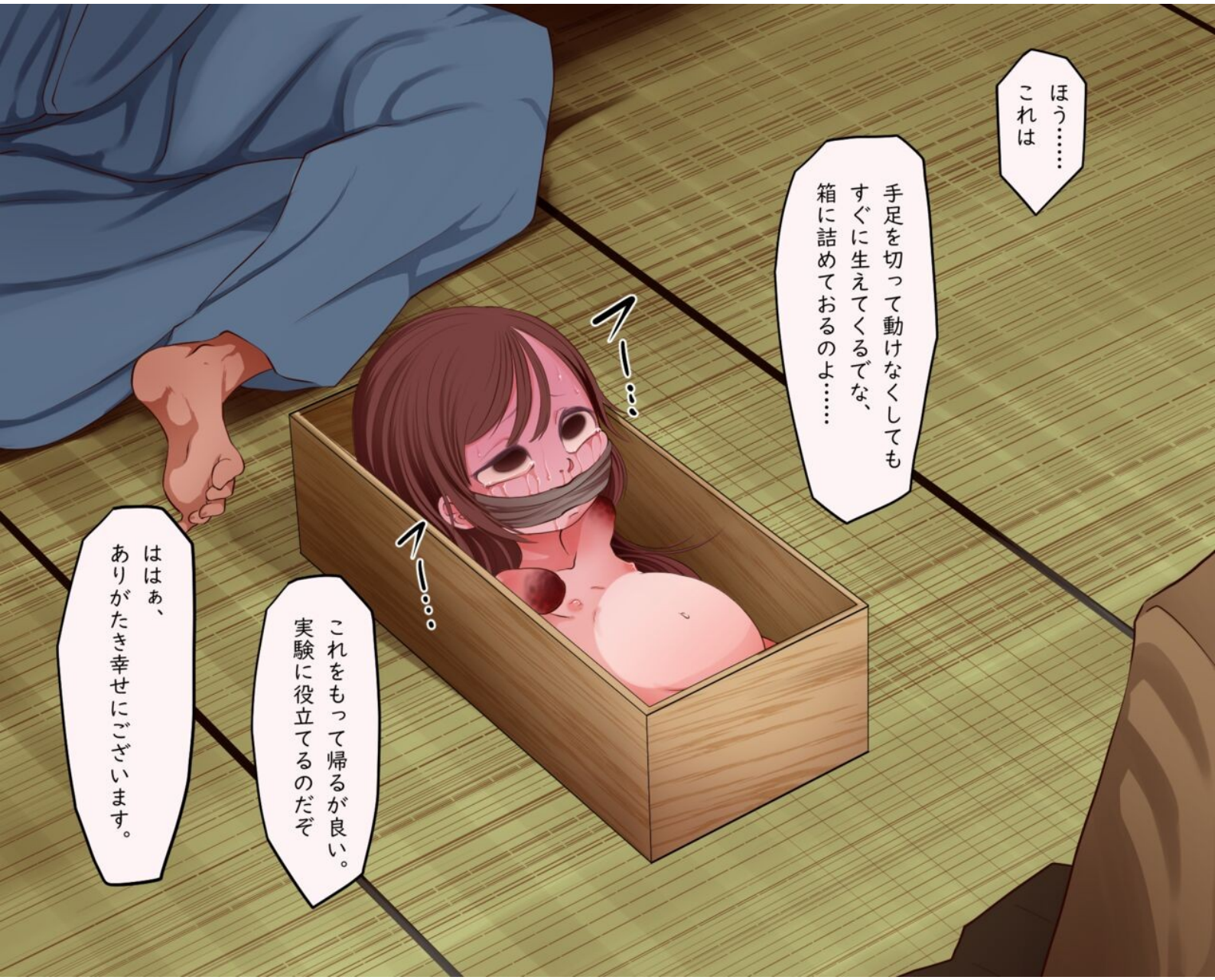
うむ、
この箱を開けるがよい

ほう……
これは

手足を切って動けなくしても
すぐに生えてくるでな、
箱に詰めておるのよ……

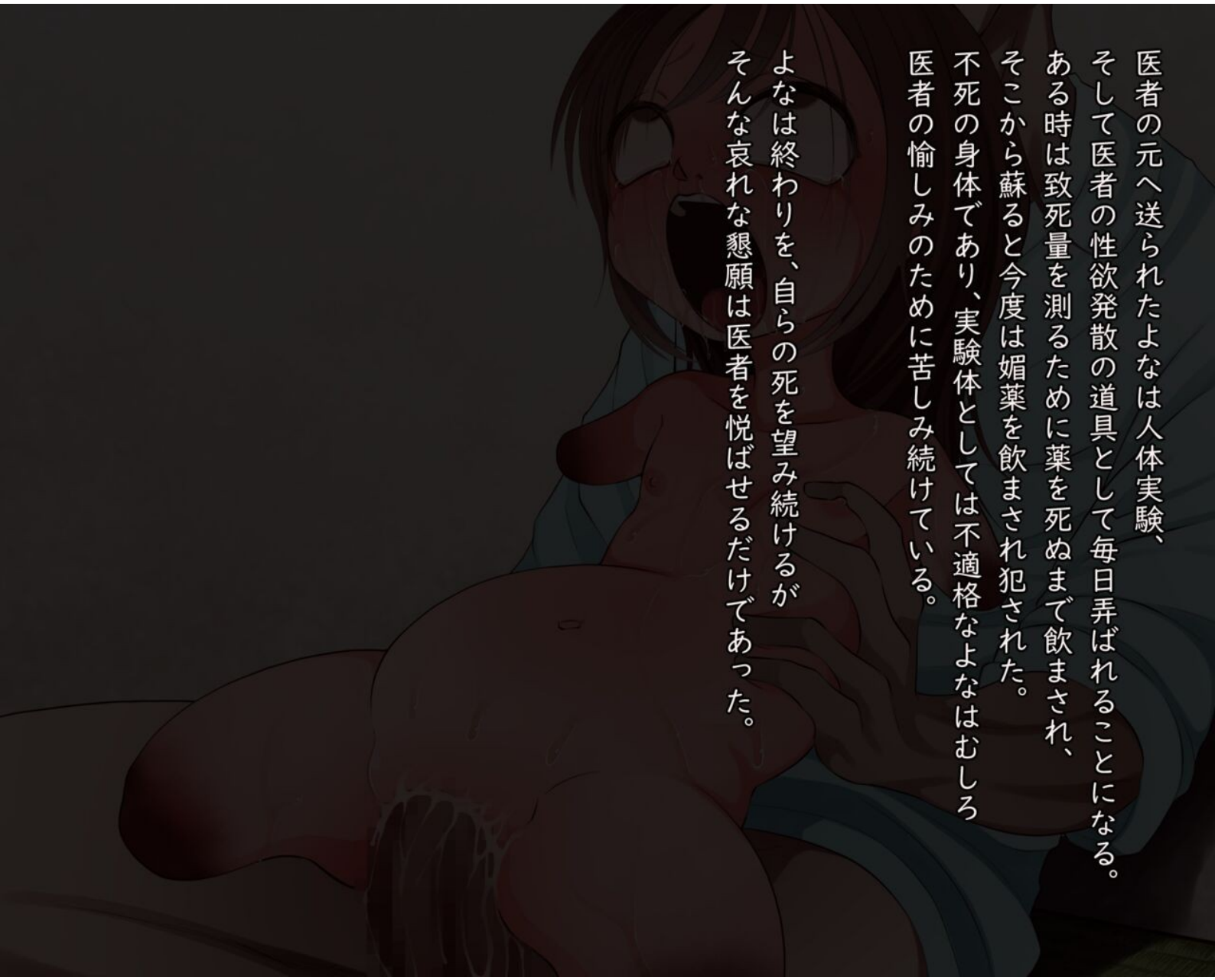
これをもって帰るが良い。
実験に役立つのだぞ

ははあ、
ありがたき幸せにございます。



ふふ……やれやれ体よく押し付けられてしまったな、
死なぬのならば薬の致死量を測る実験には使えぬではないか。
しかし良き物なのもまた事実……
それに、このような若い娘を自由にできるのはまた……





医者の元へ送られたよなは人体実験、
そして医者 of 性欲発散の道具として毎日弄ばれることになる。
ある時は致死量を測るために薬を死ぬまで飲まされ、
そこから蘇ると今度は媚薬を飲まされ犯された。
不死の身体であり、実験体としては不適合なよなはむしろ
医者 of 愉しみのために苦しみ続けている。

よなは終わりを、自らの死を望み続けるが
そんな哀れな懇願は医者 を悦ばせるだけであった。



今度の薬はどうだ？

全身に針が刺さったように
痛いだろう？

拷問に使うかと思っ
ている薬だな

致死量が未だつかめず
実験段階のものだが……

ふっ、お前に使った所で
致死量はわからぬわな

しびしいい
しびしいい

グキョッ

グキョッ

お

お

お
お
お
お
お

グキョッ

グキョッ

グキョッ

よしよし、それじゃあ
今度は気持ちよくなる
薬を飲ませてやろう

これは渡来品でな
効能を確かめる
良い機会だ。

ぐんぐん!

やっやっ!

んががががが!

やっやっ!

ぐちゅっ
ぐちゅっ
ぐちゅっ







ホッ？...

はっ
はっ
はっ

ふう……
おや、壊れてしまったか

ハッ……

ま、こうなっても半日も
経たずに元に戻るのだが

まったく不死身には
なりたくないものだ。

はっ

はっ

はっ

はっ

ぐんぐん

ぐんぐん

ぐんぐん……

それから8ヶ月ほどの時が過ぎた。
驚くべきことによなは妊娠していた、
常人ならば毎日10回は死ぬような地獄の中で身ごもったのだ。
医者が診る限り、腹の子供は順調に成長しているようだった、
よなどと同じく不死身かそこまでするのではなくともかなり頑丈な身体のようなのだ。
こうなると医者の好奇心はよなよりも腹の子供に移っていった。

妊娠以外に一つよなの身体に変化がある。
薬で引き起こされていた激痛が引かなくなったのだ。
普段であれば1日もあればよなの異常な回復能力で元に戻るのだが、
妊娠に気付いた医者が薬の投与をやめて1ヶ月、2カ月が経っても
激痛が引かず一日中狂った犬のように呻き続けている。

恐らくよなは病気になったのだ。
数多に飲まされた薬の成分のどれかは分からぬが、
それが蓄積し体に残り続けよなの神経を蝕んでいる。
こうなってしまうてはもう薬の実験台としては何の意味も持たない。
医者はよなの処分を考えていた。



ヤダああああ

ふう、とりあえず
これで身体の自由は
奪えたかな

はあ、石膏が固まるまで
押さえつけるのは
大変だった……

おなかいい

まっんんんっ!

ヤダッ

息ができなくても
苦しむばかりで
生きていける事は確認済みだ

あとは口まで
石膏で覆ってしまえば
静かになるだろう。

まっんんんんんんんん



今後の伽の世話は
お前の子供を
使ってやるとするか

おぶおぶ

んぶぶぶぶ

おぶおぶ

このまんこも
今回で使い収めだな

今後は精子を注入して
孕み袋として
有効活用させてもらおう

びゅびゅ
びゅびゅ
びゅびゅ



あーあーあー
あーあーあー

あー

あー

かー
かー

びしょっ
びしょっ

びしょっ
びしょっ

あー

そらっ
最後の射精だっ

とくと味わえっ！





ふふ……これから面白くなりそうだ

おっと……その前にこれの処理を完璧にしないとな

ひゅっ

うひゃー……

ひゅっ

ひゅっ

うひゃー……

うむ……予想通りの健康体だな

不死身かどうかは調べてみないとわからんが……

ひゅっ

ひゅっ

ぐらぶー

てちやっ

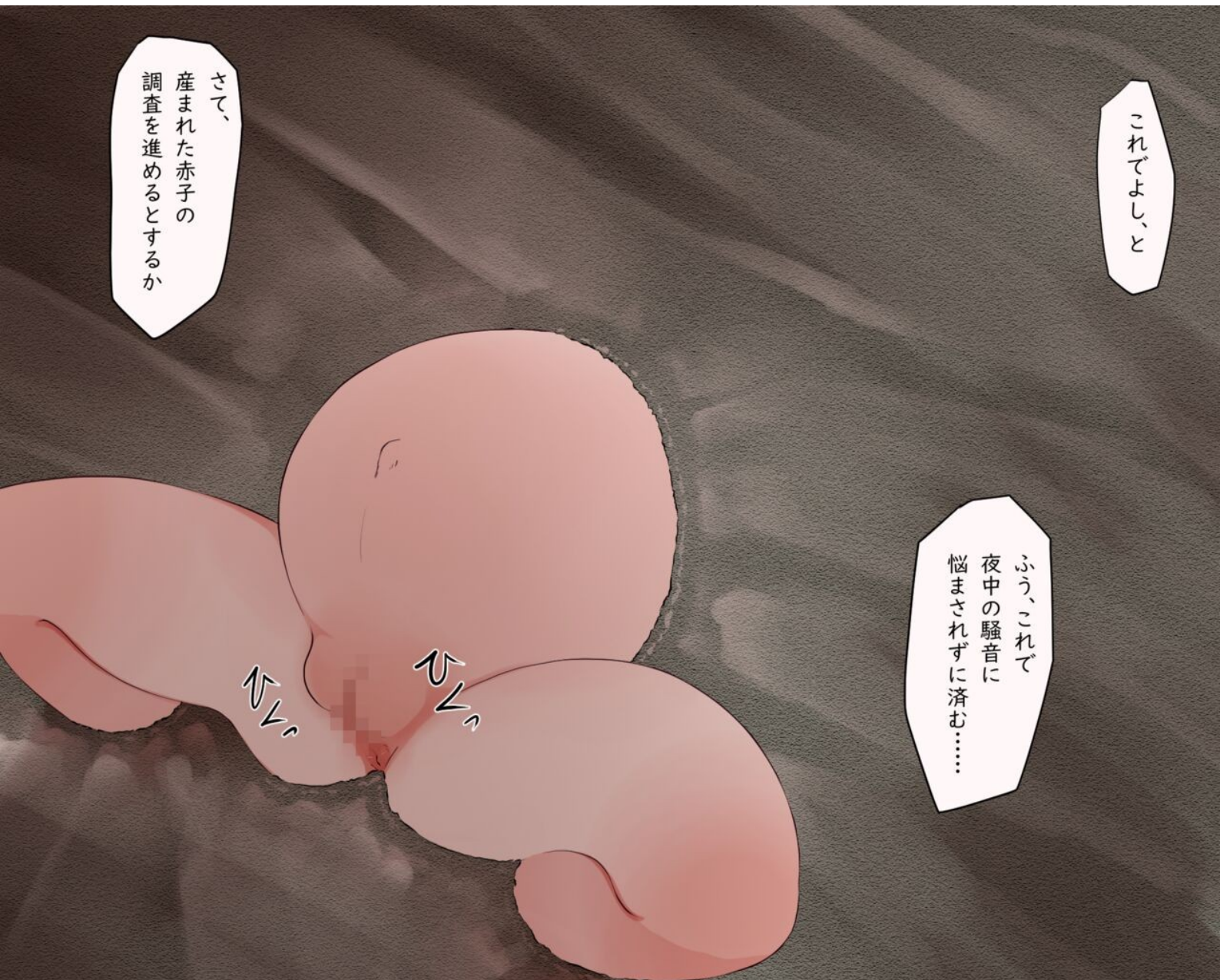
これでよし、と

ふう、これで
夜中の騒音に
悩まされずに済む……

さて、
産まれた赤子の
調査を進めるとするか

ひゅっ

ひゅっ



そして数百年の時が過ぎた

はあ、久しぶりに来たら
やっぱり荒れてんなあ

基本的に精子注入と出産の
時以外は放置ですからね

ああ、でもやっぱり
定期的にメンテナン
スしないとまずいって

この間なんてさ
膣の中にねずみが住みついて
はらわたを散々食い荒らしてたんだよ

うわあ……

奴隷出荷の商売人としちゃ
金の卵を産む鶏なんだから
もう少し大切に扱ってやりたいもんだよ

数百年の時が経ってもよなは生きていた。
壁に磔のまま、時には飢饉の非常食としてはらわたをえぐり出され
時には家人に忘れられて百年以上放置されたこともあった。
そして現在では奴隷として出荷するための子供を出産し続ける
金の卵を産む、鶏として生き続けているのだ。
きつとよなはこれからも何百年、何千年と生き続けるだろう。
呼吸も身動きもできない冷たい壁の中で、
癒える事のない病の激痛だけを感じながら……